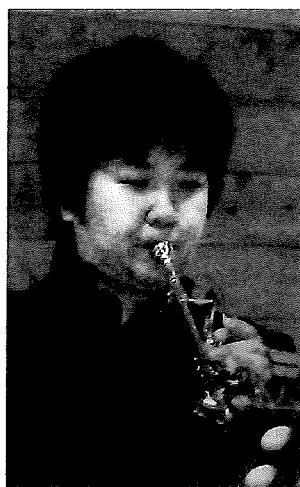


無理なんかじゃない



北海道

鈴木
木由
紀

「ねえ、どうして大勢の人が観る所に立てるの？ 強いね」

こう言われたのは、二〇〇三年、私がいつも普通に立っていた場所に戻った日だった。どうして？
と言われてもそこは、私にとっては、緊張するが、気持ちの良い大好きな場所。だから、その質問は私にとっては、何の不思議なことではない。

「私が大好きな場所に戻っただけですよ」
という答えしかできなかつた。

私は、一九九七年と一九九九年の事故が重なり、右腕が麻痺まひしてしまった。それは、本当に突然とつぜんのことであり、予測なんてできるはずがなかった。病院で看護師さんから

「もう使えないと思うから、左手で何でもできる様にした方がいいよ」

とドクターから言われる前に聞いた時、何故なぜか自然に納得できた。確かに落ち込んだし、たくさん不安があった。本当は泣き叫んでテレビドラマの様に病院食をバーンってひっくり返そうかと思うこともあった。でも、私は、冷静だった。

「ひっくり返したら後片づけが大変だし、文句言われるだろうな。そんなの面倒くさい」
心の中で思い、次の問題をどうしたら良いか考えた。

私は、小学校の先生をしていた。その、小学校での行事の打ち上げで、泥酔した同僚がいきなり後ろからぶつかってきて、ガラス戸に激突したのが、最初だった。でも、麻痺したけど、治らないとは思っていなかったし、仕事には戻れると、心配はしていなかった。それより、私は、小さい頃から音楽の道を進んできた。一度も辞めようと思ったこともなく、ただ、自然に空気の様に、仕事をしながら、演奏活動もしてきた。ステージでトランペットを吹くのが大好きだった。だから、右手が動かないとなるとどうやって吹いたら良いかということになる。左が動かないのなら、何とか右手一本で吹けることはすぐに考えついた。でも、右腕が動かない。

「辞めよう」

そんなことは一切考えなかった。十九年、毎日生活の中に普通に練習時間があつた。だから、私にとってはご飯を食べるのと一緒だったし、練習しないとなんだか変な感じがした。すぐに大学の時の先生に電話をかけた。

「先生、右腕が動かなくなっていました。どうやって左手で演奏したらよいですか？」
先生は

「大丈夫。今は治療に専念しよう。絶対吹けないようにはしないから安心して」
約一年の入院生活。私は、ドクターにリハビリとして、トランペットの練習ができるようお願いした。左手で最初に吹いた時

「プスッ」

音にはならなかった。この時はさすがに冷静ではいられなかった。涙も出てきた。

「音楽大学行ったのに」

でも、この時私を支えてくれた入院仲間がいた。音とは言えない音だったのに
「今度、何か得意な曲聴かせてね」

普通に言ってくれた。それは、私にとって、プレッシャーでも何でもなく練習が生活の中に戻った瞬間かも知れないと今思う。

入院生活が一旦終わいったんった時に、私に赤い写真入りの手帳が送られた。障害者手帳。今まで、見たこ

ともないし、考えたこともなかった。でも、右手を装具で覆われている私に周囲の目は注目し、声をかける。

「スポーツで骨折？」

「転んだの？」

これはありふれた質問だから違っても

「はい」

で終わる。でも、デパートで買い物をしている時、一人の子どもを連れのお母さんが

「あれ見てごらん。手ないよ」

と、子どもに大きな声で言ったことがあった。信じられなかった。腕はあるし、動かないだけなのに、それも小さい子どもに親がわざわざ指をさして言うという現実。世界にはたくさんの方に不自由を持った人がいる。でも、私は、こうなるまで他人事で、チャリティーコンサートや訪問コンサートはしていたが、ただ、街を歩いているだけで、こんな思いをすることということを考えもしなかった。だから、家に閉じこもっている人が多いのかなと初めて感じた。厳しい現実だった。

病院に行くと待ち時間がある。その時にどうしても、みんな暇だから話をする。

「右腕で大変だね。どうしたの？」

聞かれるから事故と麻痺のことを伝えようと、だいたいは

「手で良かったね」

と言う。手で良かった？ 私にとっては手はとっても必要なもの。どこが不自由になっても良いことなんてない。この言葉はとても傷ついた。それから、私は、音楽を聞く様になった。例え音楽が流れていなくても、ヘッドホンをしていたら、声はかけてこない。私なりの防御だった。

右腕が麻痺してから初めてのステージに立ったのは、入院していた病院のクリスマスパーティーだった。CDを伴奏にかけカラオケで演奏した。演奏した時、すぐに目に入ってきたのは、泣いている人だった。片手での演奏は自分にとっては、まだ満足できなかった。

「あの人が泣いているんだろう？ 下手な演奏で片手で吹いてかわいそうと思っているのかな？」
私は、演奏中ずっとそんなことばかり頭の中で考えていた。その後、ステージに立っても、必ずと言って良いほど、泣いている人が目に入ってきた。そして、演奏が終わると、

「左手だけで演奏して、すごいね」

「障害に負けないでえらいね」

「かわいそうに」

こういう言葉をかけられた。その度に、自分がステージに立った後の会話が嫌になった。

「かわいそうなんかじゃない。私がトランペット吹くことは特別じゃなく普通なんだ」

そして、中学生から習っている先生の吹き初め会に、麻痺して初めて参加した。何を考えたのか、

プライドが許さなかったのか、私は大学生の頃に吹いた難しい、それも長い曲を選んだ。会場に着くと「どうしたのですか？」

この質問ばかりでまず疲れてしまった。そして、門下生の演奏が次々に行われる。私の順番になり、ステージに立った。ピアノ伴奏が始まって今までにないことが自分の中に起きてしまった。

「みんな見てる。片手の私の悲惨な演奏をみんなが聴いている」

そう思つて不安になった途端、左腕も足も震えた。更に私は、

「もう見ないで、私だけ下手になつて悔しい。あの事故がなかったら」

今まで、そんなに考えていないことを次から次へと考えていく。そして、早く終わりたい。ステージから降りたい。そんな気持ちになつてしまった。大好きだったステージで気持ちの悪い緊張感を感じるいつもの私が、不安だらけになつてしまったのだ。そして、嫌な場所になつていくその気持ちを持った自分が嫌になった。

演奏が終わり

「片手ですごい頑張つたね」

と言われると、なぜ

「練習不足。前より全然吹けていない」

と言つてくれないのか？ 同情しなくていいのに、と本当に嫌な自分になつていた。それからス

テージに立つと震えるようになってしまった。次第に演奏する自信もなくなり、ひとりで悩んだ。でも、トランペットは辞めたくなかった。こうなったことで、私は、楽しくなってきたのははじめの仕事
を辞め、三歳からずっと続けてきた電子オルガン、ピアノも諦めるしかなかった。だから、トラン
ペットを辞めるということは絶対に考えたくなかった。

「好きなものだけできる」

こう言われたことは何回もある。そう言われると悔しさが倍増した。

「なぜ、わかってくれないんだろう？」

それだけをやるうとしていく訳じゃない。まずは、トランペットを今までの様に吹きたかった。だから、欲張って何個も挑戦しなかつただけ。

ある時、主治医の先生に

「トランペットを長い時間吹きたいけど、重たくて支えるだけで精いっぱい吹きたいように吹けません」

と話した。すると、先生は、すぐに

「支えるものを考えたら良いんじゃない？ 装具屋さんに相談してみたら」とおっしゃった。

すぐに、装具屋さんに相談すると、半分断られるかなと諦めていたのに

「考えてみるから、楽器持って来て」

という嬉しい答えが返ってきた。

楽器を持って病院に行って吹く格好をし、構えると、いろいろな場所の採寸が始まった。そして、それと同時に、中学生から習っているトランペットの先生が、

「トランペットを片手で吹けるように改造しに行こう」

と楽器屋さんに連れて行って下さった。嬉しくて、嬉しくてたまらなかった。そして、優しさを感じた。私の為に大切な時間を使って下さることに感謝の心でいっぱいになり、私は、ステージに戻る為に練習をしようと強く思った。そして、改造楽器が完成。大好きな金のトランペットに傷を付けるのは嫌だったが、片手で吹けることは嬉しかった。でも、やっぱり重くて大変だった。改造したことによって楽器のリングが増え重くなってしまった。でも、装具屋さんが楽器を支える装具を作って下さった。

「ありがとうございます。おいくらですか？」

手につける装具はとっても高い。だから、特別に作ってもらったからかなり高額だろうと考えていた。でも

「夢に値段はつけられないからこれで夢を叶えてね。これは、プレゼントだよ」とおっしゃって下さった。

私は、その病院で二〇〇三年、装具が完成した三日後、コンサートを再開した。もう震えはなかった。入院仲間が、全部サポートしてくれた。司会進行も、準備も。

私は、先生、看護師さんに感謝を込めて演奏をしたかった。その病院は「痛い」ということを信じてくれ治療してくれた。会場は、びっしりになり、出されていたイスが足りなくなった。本当に嬉しかった。先生方も聴きに来て下さった。そして、入院患者さんも。

一時間。装具ができる前は一曲吹く度に休憩しなくては演奏できなかつた。でも、一時間以上のソロコンサートを無事終えることができた。麻酔科の先生が

「倒れたらいつでも治療できるようにしていた」

とおっしゃった。そして、次の診察の時に

「痛いのは任せて、みんなの為に思いっきり演奏して、みんなの心を癒してあげてね」とおっしゃって下さった。

このコンサートでも、何人も涙を流している人がいた。でも、もう気にならなくなっていた。それは、他の病院のクリスマス会の時に、一曲だけ吹いた時だった。

吹き始めるとたくさん泣いている人が目に入り、心の中で

「あーまたか。そんなにかわいそうにみえるのかな？」

と思った。でも、終わった時に一人のお婆ばあさんが車椅子いすでそばに来て

「ありがとう。今日の曲大好きな曲で、涙が出てしまったよ。少しの間病気のこと忘れられたよ。本当にありがとう」

とおっしゃられた。

「えっ、かわいそうで泣いているんじゃないんだ。難しい曲をお客さんは望んでいる訳じゃないんだ」この時から涙を流している人がいても気にならなくなった。そして、今の自分に無理な難しい曲をわざわざ演奏しなくなった。今演奏できる曲を心を込めて演奏するようにした。それが、私にとっての前進だった。

そして、目の不自由なりハビリの先生から

「障害を受け入れよう」

と言われた時、初めて

「私の右腕はもう動かない。でもできることはたくさんある」

と思うことができた。それから、たくさんさんのステージにラジオ、病院にホスピス、施設と、聴きたいと言われる所には可能な限り行ってコンサートを開催している。片腕で好きなことをしている私を見て、もしかしたら、

「自分にも何かできる」

と思ってくれる人がいるかも知れないし、私の演奏の間だけかも知れないが、身体や心の痛み、そ

して、病氣、悩みを忘れられるかも知れない。そう願って演奏するようにしている。左腕も万全ではないので、痛みに耐えて演奏しなければならない時もある。でも、私には支えてくれる周りの方々がたくさんいると思うと痛いことも辛いことも忘れてしまう。

今、私は、左手だけでトランペットを吹くことが普通になっている。だから、これからもずっと聴きたいと言われる場所に行き、笑顔と心のこもった、みんなの優しい心がプラスされた演奏を届けていこうと思う。

イギリスのトランペット仲間が言ってくれた

「人間全員、障害を持っているよ。足の遅い人。運動が苦手な人。計算が苦手な人。自分の身体の一部が気に入らない人。いろいろ。だから、気にしないで。その身体で、夢は叶えられる。そして、一緒にステージに立とう。待っているよ」

私は、諦めない。ちょっと休んでしまったけど、今からでも遅いなんて思わず、夢を叶えるために進んでいこうと思う。

どれだけ時間がかかるかわからないけど、一歩一歩着実に歩いて行こうと思う。

鈴木由紀

昭和四十四年生まれ 無職（ボランティアで演奏活動） 北海道札幌市在住

【受賞のことば】

このNHK障害福祉賞に於いて入選できたことをとても嬉しく思い、選んで頂いたことに感謝しております。右腕が麻痺し、悔しい思い、辛い思いをしながら十年が経ちました。でも、それとは逆に今まで体験できなかった喜び、たくさんの出逢いがあり、仲間の大切さ、人の優しさを知ることができました。簡単に諦めない強い心を持てる様になりました。この文が書いたのは、出逢いがあったからだと思っております。感謝の気持ちで一杯です。

選評

「トランペットが吹きたい」その強い意志と共に一歩ずつ前に向かう姿がさわやかに描かれています。特に、左手だけで吹ける改造トランペットを楽器屋さん、装具屋さんが作ってくれるエピソードは胸を打ちます。「夢に値段はつけられないから、これはプレゼントだよ」。装具屋さんの粹な言葉が印象的です。夢を持ち続けければ、周りの人に支えられて明日は切り開けるといふ大切なメッセージを明るく具体的に伝えてくれる快作です。

（新山 賢治）